

# 使徒教父と弁証家におけるフィランソロピアの用法と救貧思想

土井 健司

## はじめに

四世紀のカップドキア教父の救貧説教を読むと、しばしば救貧との関係で「フィランソロピア」(人間愛)という概念が使われていることに気づく。ところがこの概念は、そもそもキリスト教の語彙ではなく、ギリシア文化・社会のものであった。そのため新約文書では三例しか見出せない(使徒27章3節、28章2節、テトス3章4節)。これらのなかでも、キリスト教思想という視点からすると重要な箇所はテトス3章4節の一つしかない。そこでは「しかし、わたしたちの救い主である神の慈しみと、人間に対する愛(ἡ φιλανθρωπία)とが現れたときに、[5節]神は、わたしたちが行った義の業によってではなく、ご自分の憐れみによって、わたしたちを救ってくださいました」(新共同訳)と記されている。おそらくここでこの概念はキリストの受肉を述べているのであって、「救貧」の文脈で使われているのではない。なお使徒言行録では、それぞれローマの百卒長ユリウスならびにマルタ島の住民がパウロに「親切」であったことをフィランソロピアで表現するにとどまる。

では、フィランソロピアを救貧の文脈で使用することは四世紀のカップドキア教父の特徴であるのか、それとも彼らに先立って、新約後にそのような伝統が形成されていたのか。また形成されたとすれば、それはいつ頃なのか。本論文は、こうした問題意識をもってカップドキア教父以前のキリスト教文献におけるフィランソロピア概念の用例をくまなく調べようとする研究の一部となる。ここでは使徒教父と呼ばれる人びとの文献、ならびに弁証家たちの文書を取り上げて、それらに見出されるこの概念の用例を調査し、救貧問題との関連を考察してみたい。

ところでフィランソロピア(形容詞はフィランソロポス)は「人間愛」を意味するが、大変幅のある言葉であって、文脈によって「人間最良」「同胞愛」「優しさ」「お人好し」「人懐っこさ」「快適さ」「特権」など多様な意味に変化する<sup>(1)</sup>。そこでこの概念の用法・意味を確定するためには、この概念の分析方法として、フィランソロピ

(1) 本論文はフィランソロピアの概念研究であるので、「フィランソロピア」を含む引用文ではこの概念を明示するために訳すことなく、ギリシア語の概念として提示する。

アの主体は誰（何）か、またその客体として誰（何）に対するフィランソロピアなのか、そしてフィランソロピアの内実は何か、これら三者に注意しつつ考察せねばならない。この三者が明確である場合にフィランソロピアの用法も明確になるからである。

## 1. 使徒教父文書とフィランソロピアの用例

「使徒教父」の概念は17世紀のコトゥリエの著作にさかのぼるが<sup>(2)</sup>、その意図するところは使徒時代あるいはその直後に活躍した教父を言おうとするものであった。しかしそこに含まれているものは必ずしも使徒の時代あるいはその直後のものとは言えないものもある。2世紀のキリスト教文学は、一部の新約文書、新約外典ならびに偽典、そのほか使徒教父文書、弁証家の著作に分類されるが、入り混じっている場合もある。たとえばクアドラトス<sup>(3)</sup>は使徒教父に分類されるが、弁証家であり、また「ディオグネトスへの手紙」（の著者）は使徒教父とされるが、二世紀末の弁証文学である。こうした問題点を念頭におきつつも、一般に「使徒教父」と言うと、ローマのクレメンス、イグナティオス、ヘルマス、ポリュカルポス、パピラス（断片）、「バルナバの手紙」（の著者）、「ディオグネトスへの手紙」（の著者）、「クレメンスの第二の手紙」（の著者）、「ディダケー」（の著者）のことを指す（これに「ポリュカルポスの殉教」などを加える場合もある）。そこでこれらの著作におけるフィランソロピアの用例を調べてみたい。

使徒教父文書について、TLGをφιλανθρωπι-で検索してみると、4例が挙がってくる。アンティオケアのイグナティオスの手紙に2例、「ディオグネトスへの手紙」のものが2例である。ただイグナティオスの用例は、今日真筆が認められている七書簡に含まれるものではなく、後代の加筆がなされた版の一部であって<sup>(4)</sup>、いずれもイグナティオス自身の手になる箇所とは認めがたい。ちなみのその一つは「フィラデルフィアの教会への手紙」であり、他は「エフェソの教会への手紙」である。前者には「というのもわたしたちの神はフィランソロポスであって、万人を救い、真理の認識に來らせようと望んでおられる」<sup>(5)</sup>と記され、後者では「神のうちにあるあなた方から待望の名を獲得したのですが、それをあなた方は自然にわれわれの救い主イエス・

(2) J. B. Cotelier, S.S. Patrum qui temporibus apostolicis floruerunt, Paris 1672.

(3) 本論文における古代キリスト教著作作家および文書名は、原則次の文献にもとづく。水垣渉・泉治典監修『キリスト教教父事典』、教文館、2002年。

(4) F. Diekamp and F. X. Funk, Patres Apostolici, vol.2 Tübingen, 1913<sup>3</sup>.

(5) φιλάθρωπος γάρ ἐστιν ὁ θεὸς ἡμῶν, καὶ πάντας ἀνθρώπους θέλει σωθῆναι καὶ εἰς ἐπίγνωσιν ἀληθείας ἐλθεῖν. (3,6; Patres Apostolici, p.174)

キリストへの信仰と愛において正当にも獲得なさっています。あなた方は神のフィランスロピアを模倣し、キリストの血において活気づき、同じ出自の業を完成に導いたのです」<sup>(6)</sup>とある。いずれも神のフィランスロピアを述べるが、後者についてはその「模倣」が語られ、具体的内容が問われよう。「キリストの血において活気づき・・・」とは殉教のことを指すと推定されるが、「神のフィランスロピアを模倣し」については信仰生活における隣人愛のことと考えるのが妥当であろう。とは言え、いずれにしてもイグナティオス自身の手によるものと認められず、後代のものであって、少なくとも二世紀のものとするにはできない。

使徒教父文書に分類されるものの、早くとも二世紀末に属する「ディオグネトスへの手紙」からは二カ所が見出される。

(D-1)<sup>(7)</sup> 神は世界の主、創造主であり、万物を創り、秩序にしたがって区分し、フィランスロピアであっただけでなく、寛大な方である<sup>(8)</sup>。(第8章7節)

(D-2) 将来自らの愛と力を明らかにしようとして——神のフィランスロピアと愛とは超越している——神が前もって定めておいた時が来た<sup>(9)</sup>。(第9章2節)

これらにおいてフィランスロピアの主体は、神であることは明白である。その対象は、(1) の場合は万物であって、フィランスロピアの内実は創造ということになる。つまり神が万物を創造したことについてフィランスロピア概念が用いられている。(2) の場合、主体が神であることは(1)と同様に明らかである。ただ、対象やその内実はこの部分だけでは定めがたいが、摂理を意味すると思われる。

使徒教父文書に分類されるものにおけるフィランスロピアの用例は以上に尽きる。厳密な意味で使徒教父文書とされるものの中にフィランスロピア概念は見出されることはない。また「ディオグネトスへの手紙」の用例は、いずれも神のフィランスロピアについて述べるものであって、創造や摂理のことを意味している。使徒教父文書に分類されるが二世紀後半のものであるので、この時期には創造や摂理をフィランスロピアで表現するなんらかのキリスト教思想が成立していたと推定することも可能であ

(6) Ἐποδοξάμενος ὑμῶν ἐν θεῷ τὸ πολυπόθητον ὄνομα, ὃ κέκτησθε φύσει δικαίᾳ κατὰ πίστιν καὶ ἀγάπην ἐν Χριστῷ Ἰησοῦ τῷ σωτῆρι ἡμῶν, μιμηταὶ ὄντες θεοῦ φιλανθρωπίας, ἀναζωοपुरήσαντες ἐν αἵματι Χριστοῦ τὸ συγγενικὸν ἔργον τελείως ἀπηρτίσατε. (I,1; Patres Apostolici, p.234)

(7) 以下本稿では、フィランスロピア概念の用例について各著者・文書の頭文字と掲載順を括弧によって表示する。またフィランスロピアの用例として認められる引用はイタリック体で表示する。

(8) Ὁ γὰρ δεσπότης καὶ δημιουργὸς τῶν ὅλων θεός, ὁ ποιήσας τὰ πάντα καὶ κατὰ τάξιν διακρίνας, οὐ μόνον φιάνθρωπος ἐγένετο ἀλλὰ καὶ μακρόθυμος. (II, p.146) 「ディオグネトスへの手紙」を含めて、使徒教父のテキストは次の文献を使用。Bart D. Ehrman (ed. and tr.), The Apostolic Fathers, 2Vols, LCL24/25, 2003. なお日本語訳は、訳書が公刊されている場合は、既刊の邦訳書を用いるが、脚注1に記したように、フィランスロピアはそのまま訳さないなど変更して掲載する。「ディオグネトスへの手紙」については次の文献を使用。佐竹明訳「ディオグネトスへの手紙」、荒井献編『使徒教父文書』所収、講談社文芸文庫、1998年、271頁。

(9) ἦλθε δὲ ὁ καιρὸς ὃν θεὸς προέθετο λοιπὸν φανερώσῃ τὴν ἑαυτοῦ χρηστότητα καὶ δύναμιν—<ὡ> τῆς ὑπερβαλλούσης φιλανθρωπίας <καὶ ἀγάπης> τοῦ θεοῦ. (II, p.148), 邦訳272頁。

ろう。いずれにしてもわれわれの研究目的からすると、その用例は救貧を意味するものではないことは明白である。では、そもそも使徒教父文書では救貧は語られないのであろうか。もし救貧に関する記事が存在しないのであれば、フィラソロピアとの関連を議論する必要がないことになっていただろう。

## 2. 使徒教父文書における救貧思想

使徒教父における救貧に関連する記事は、なにか特定の概念といった指標を使い箇所を選定することも考えられるが、むしろ柔軟に対応して該当箇所を見出すことで十分と思われる。たとえば「ポリュカルポスの手紙」には、「長老たちもまた、憐れみ深く、万人に慈悲深く、迷い出た者どもをたちかえらせ、すべての病人の世話をし、寡婦あるいは孤児、貧者を世話もせずにいることなく、神と人びとの前で常に善きことを思いなさい」<sup>(10)</sup> といった文言が見出せる（6章1節）。あるいは「バルナバの手紙」3章3節にはマタイ福音書25章35節以下を敷衍しつつ、次のような行がある。

見よ、これこそ私の選んだ断食である—と主は言われる—。すなわち、あらゆる不正の枷を解き放ち、無理強いされたがんじがらめの契約を解消し、打ちひしがれている者を放免して去らせ、あらゆる不正な証書を引き裂きなさい。飢えている人たちにあなたのパンを与え、裸の人を見たら、着物を着せてやりなさい。家のない人たちをあなたの家に導き入れなさい。身分の低い人を見ても、彼を軽んじてはならない。またあなたの血縁の家族から（目をそむけてはならない）。<sup>(11)</sup>

こうした救貧の勧めは複数箇所見出せるが、そうした箇所のなかでも単なる勧めではなく、救貧思想を前提とするものがある。たとえば「クレメンスの第一の手紙」38章2節には「富者は貧者を援助し、貧者は神に対して、その乏しさを満たしてくれる者を与えてくださったことを感謝するように」<sup>(12)</sup> との一文が見られる。ここでは「富者」、「貧者」、「神」の三者の関係が問題となっているが、富者が与える、その結果貧者は満たされ、神に感謝する、なぜなら神が富者を貧者に与えたからと考えられてい

(10) καὶ οἱ πρεσβύτεροι δὲ εὐσπλαγχοὶ, εἰς πάντας ἐλεήμονες, ἐπιστρέφοντες τὰ ἀποπεπλανημένα, ἐπισκεπτόμενοι πάντας ἀσθενεῖς, μὴ ἀμελοῦντες χήρας ἢ ὄρφανου ἢ πένυτος· ἀλλὰ προνοῦντες αἰεὶ τοῦ καλοῦ ἐνώπιον θεοῦ καὶ ἀνθρώπων. (I, p.340), 田川健三訳、「ポリュカルポスの手紙」、荒井献編『使徒教父文書』所収、講談社文芸文庫、1998年、218頁。

(11) ἰδοὺ αὕτη ἡ νηστεία ἣν ἐγὼ ἐξελεξάμην, λέγει κύριος, λύε πάντα σύνδεσμον ἀδικίας, διάλυε στραγγαλιὰς βιαίων συναλλαγμάτων, ἀπόστειλε τεθραυσμένους ἐν ἀφ᾿εσει, καὶ πᾶσαν ἄδικον συγγραφὴν διάσπα. διάθρυπτε πεινώσιν τὸν ἄρτον σου, καὶ γυμνὸν ἐὰν ἴδῃς περιβαλε· ἀστέγους εἴσαγε εἰς τὸν οἶκόν σου, καὶ ἐὰν ἴδῃς ταπεινόν, οὐχ ὑπερόψη αὐτόν, οὐδὲ ἀπὸ τῶν οἰκίων τοῦ σπέρματός σου. (II, p.18), 佐竹明訳「バルナバの手紙」、荒井献編『使徒教父文書』所収、講談社文芸文庫、1998年、45頁。

(12) ὁ πλούσιος ἐπιχορηγείτω τῷ πτωχῷ, ὁ δὲ πτωχὸς εὐχαριστεῖτω τῷ θεῷ, ὅτι ἔδωκεν αὐτῷ δι' οὗ ἀναπληρωθῆ αὐτοῦ τὸ ὑστέρημα. (I, p.102)

る。こうして富者—貧者—神の三角関係が形成されるが、神が富者に何を与えるのかは語られていない。おそらくふさわしい報いが与えられると読み込んでよいであろう。また貧者は神だけでなく、富者に感謝するのは、この一文の直前に「強者は弱者を配慮し、弱者は強者を敬うように」とあることから明らかである。いずれにしても興味深いのは、救貧において富者—貧者関係だけでなく、ここに神という第三者が介在していることである。

この三者関係は「クレメンスの第二の手紙」でも確認できる。4章3節には「またお互いに同情しあうべきであって、お金の固執してはなりません。このような行いによって彼を告白しましょう。これらと正反対の行いによってではありません」と記される<sup>(13)</sup>。ここでは、富者—貧者関係というよりも、誰でもが兄弟の関係にあって互いに同情すべきであると言われており（三節は「兄弟たちよ」という呼びかけではじまる）、兄弟関係が問題となっているが、こうした行為において「彼を告白する」こと、即ちキリストとの関係が語られている。したがってここでも救貧に関する兄弟的交わりにおいて神という第三者が介在することになる。

こうした富者—貧者—神の三者関係について興味深い思想を提示しているのは「ヘルマスの牧者」である。その第二のたとえの4節から10節までには次のようなことが述べられている。富者は財産をもつのだが、神の前では乏しい。それに対して貧者は、財産では乏しいが神の前では豊かであるので、その祈りは聞き届けられる。そこで富者は、貧者に施しをして、自分のために神に祈ってもらうのが効果的である。「貧者は富者に助けられて、この与える者について神に祈り、感謝をささげる。富者は、貧者が生活の中で常に祈り続けることができるように、いっそう貧者に熱心になる。富者は貧者の祈願が神の前で受け入れられ、富んでいることを知っているからである。<sup>(14)</sup>」

ここでは富者と貧者の関係が一方的なものではなく、相互的であることが述べられている。富者は貧者に施しをするのだが、貧者にはお返しする能力がある。それは祈りである。貧者の祈りによって富者は神に受け入れられるようになる。富者が与える、その結果貧者は満たされ、富者のために祈る。すると神は富者に恵みを与える。これは富者自身では成し遂げられないことであって、貧者の祈祷によってはじめて得られる。こうした互助性の思想が救貧を基礎付ける。なお三世紀初頭のものと推定さ

(13) καὶ συμπάσχειν ἀλλήλοις ὀφείλομεν, καὶ μὴ φιλαγυρεῖν, ἐν τούτοις τοῖς ἔργοις ὁμολογῶμεν αὐτὸν καὶ μὴ ἐν τοῖς ἐναντίοις. (I, p.170), 小河陽「クレメンスの手紙—コリントのキリスト者へ (II)」, 荒井献編『使徒教父文書』所収、講談社文芸文庫、1998年、140頁。

(14) ὁ πένης οὖν ἐπιχορηγούμενος ὑπὸ τοῦ πλουσίου ἐντυγχάνει τῷ θεῷ εὐχαριστῶν αὐτῷ ὑπὲρ τοῦ διδόντος αὐτῷ· κἀκεῖνος ἐτι ἐπισπουδάζει περὶ τοῦ πένητος, ἵνα ἀδιάλειπτος γένηται ἐν τῇ ζωῇ αὐτοῦ· οἶδε γάρ, ὅτι ἡ τοῦ πένητος ἐντευξις προσδεκτή ἐστὶν καὶ πλουσία πρὸς κύριον. (II, p.312), 荒井献訳「ヘルマスの牧者」、荒井献編『使徒教父文書』所収、講談社文芸文庫、1998年、360頁以下。

れるヒュッポリュトスの『使徒の言い伝え』(Traditio Apostolica)によると「やもめ」(Vidua; Χήρα)は聖職者のひとつに数えられており(10章)、「やもめは祈祷のために立てられている」(Vidua autem instituitur propter orationem)とその叙階について語られ、祈祷専門の下級聖職者であったことが分かっている<sup>(15)</sup>。聖書にもしばしば見られるように、「やもめ」は貧者の代表的存在のひとつであって、この人びとがもつばら祈祷担当の聖職であったことが推定される。こうした仕方で貧者は祈祷にふさわしい者と捉えられ、そのため援助を受けるに値するものとなる。つまり次のような図式になるわけである。(1) 富者は貧者に施しを与える、(2) 貧者は富者のために神に祈る、(3) 神は富者に報いを与える。こうして神を介して富者、貧者ともに互助関係にあることが確認されるわけである。こうした互助性を含む救貧思想が「ヘルマスの牧者」を超えてどの程度広がっていたのかを定めるのはむずかしいが、『使徒の言い伝え』にも関連するものが確認される以上、かなり一般的であったと推定できる。

さて、使徒教父文書において救貧を扱うテキストには、ここまで考察した箇所以外を含めても、フィランソロピアの概念は見られない。つまり事実として見れば、フィランソロピア概念は救貧の文脈では使われていないのである。そもそもフィランソロピアの使用例が使徒教父文書においては数が少ないことも考慮する必要がある。さらに救貧の文脈でフィランソロピアを使用する例はそもそもアレクサンドリアのフィロンの『徳論』において見出せるが、ここでその影響はまったく確認できない<sup>(16)</sup>。では使徒教父文書には、なぜフィランソロピア概念を使って救貧を語るものが存在しないのか。この問題を考えるためにも、さらに弁証家の著作について考察していきたい。

### 3. 弁証家ユスティノスにおけるフィランソロピアの用例と救貧記事

TLGにおいて使徒教父文書の場合と同様の条件で検索すると、ユスティノスの著作には6例が挙がってくる。『第一弁明』に1例、そして『ユダヤ人トリフォンとの対話』に5例である。

まず『第一弁明』第10章1節であるが、以下のようになる。

(J-1) しかし私どもは、神が万物を与え下さることを知っているので、人間からの物

(15) 土屋吉正訳『聖ヒュッポリュトスの使徒伝承 B・ボットの批判版による初版』、オリエンズ宗教研究所、1987年、30頁。テキストも同書に所収のものを使用した。

(16) フィロンのフィランソロピア論は、とりわけ『徳論』(De virtutibus)に詳しく、その第51節から174節までで扱われている。そこでフィロンは律法がフィランソロピアに満ちたものであること論じているが、その際とくにフィランソロピア論の対象に集中した議論を展開する。たとえば同胞への貸金において高利を禁ずるもの(82節から87節)、安息年の生産物は貧者のものとする(97節以下)、さらに異邦人、奴隷、捕虜、動物、植物に対するフィランソロピアが論じられている。

質的な贈り物を必要としないと伝え受けています。私どもが教えられ、納得し、信じていることは神が次の者どもを受け入れること、即ち神に属する善に倣う者どもを、です。この善とは、節制、正義、フィランソロピアなど神にふさわしいものです——ただし神は人間が与える名称によって呼ばれることはありません<sup>(17)</sup>。

この文章は、神像への礼拝を拒否し、神としての神像を否定する9章につづくものであって、本当の神とは何かを述べる。本当の神は奉納物を必要とすることなく、むしろよき人間を受け入れると論じられる。フィランソロピアは神の属性として言及され、つづいてその神の模倣を言う。節制、正義、フィランソロピアといった神にふさわしいものを模倣する者を、神は（捧げ物のように）受容すると述べ、捧げ物の意味を比喩的に捉えて論じている。ここで神とは、キリスト者の神であり、神を模倣する者とはキリスト者のことを指す。最初に神のフィランソロピアが語られ、その模倣としてキリスト者の節制、正義、そしてフィランソロピアが主張される。ただしここで言及されるフィランソロピアの内容を特定することはむしろかしく、人びとへの愛があるので自分たちは悪行をなすことはないという程度に理解される。

その他は『ユダヤ人トリフォンとの対話』に見られる5例である。

(J-2) 罪びとのために常に変わらない方が律法を立てたことを告白するのですが、その方はフィランソロピオスで、予見的で欠けることなく、義にして善なるものとして現れるのです。<sup>(18)</sup> (23,2)

神がフィランソロピオスであると言われるが、その向かう対象は人間一般と考えざるを得ない。文脈から推してフィランソロピアの内容は、律法を人間に与えたこと(ἐντετάλθαι)だと考えられる。

(J-3) 神の善とフィランソロピア、そしてその無尽蔵の富は、エゼキエルが明らかにしたように、罪からの回心者を義しく罪なき者とする。<sup>(19)</sup> (47,5)

ここでも神が主体として立てられている。対象は回心者、その内実は罪の赦しである。

(J-4) 神は悪から離れた者すべてに対して憐み深く、フィランソロピオスであることを信じ、かくしてこの町(=ニネベ)の王自身、貴族たちも同様に灰をかぶり、断食と

(17) Ἄλλ' οὐ δέεσθαι τῆς παρὰ ἄνθρώπων ὕλικης προσφορᾶς παρελήφαμεν τὸν θεόν, αὐτὸν παρέχοντα πάντα ὀρώντες ἐκείνους δὲ προσδέχεσθαι αὐτὸν μόνον δεδιδάγμεθα καὶ πεπεισμεθα καὶ πιστεύομεν, τοὺς τὰ προσόντα αὐτῷ ἀγαθὰ μιμουμένους, σωφροσύνην καὶ δικαιοσύνην καὶ φιλάνθρωπίαν καὶ ὅσα οἰκεία θεῷ ἐστὶ, τῷ μηδενὶ ὀνόματι θεῷ καλούμενω. テクストは次の文献を使用。A. Wartelle, *Saint Justin Apologies*, Paris; *Etudes Augustiniennes*, 1987. また邦訳は次の文献を使用。柴田有訳「ユスティノス 第一弁明」、『キリスト教教父著作集 1』所収、教文館、1992年、24頁。

(18) δι' αἰτίαν δὲ τῶν ἁμαρτωλῶν ἀνθρώπων τὸν αὐτὸν ὄντα αἰεὶ ταῦτα καὶ τὰ τοιαῦτα ἐντετάλθαι ὁμολογεῖν, καὶ φιλάνθρωπον καὶ προγνώστην καὶ ἀνευθεὴ καὶ δίκαιον καὶ ἀγαθὸν ἀποφαίνειν ἔστιν.

(19) Ἡ γὰρ χρηστότης καὶ ἡ φιλάνθρωπία τοῦ θεοῦ καὶ τὸ ἄμετρον τοῦ πλούτου αὐτοῦ τὸν μετανοοῦντα ἀπὸ τῶν ἁμαρτημάτων, ὡς δι' Ἰεζεκιήλ μνησθεῖ, ὡς δίκαιον καὶ ἀναμάρτητον ἔχει. テクストは次の文献を使用。E. J. Goodspeed, *Die aeltesten Apologeten*. Göttingen, 1915.

祈願に専念し、自分たちの町が減びないようにした。<sup>(20)</sup> (107,2)

神がフィランソロピアの主体であり、ヨナの物語について罪びとを対象とし、その罪を赦すことをこの概念で表現している。J-3と並んで罪を赦す神についてフィランソロピアが使われているが、ここでは旧約のヘセドの意味合いが認められる。

(J-5) そしてわれわれは、一人ひとり全地から戦争の道具、すなわち剣を鋤に、槍を鋤に替え、敬虔と義、フィランソロピア、信仰、そして御父ご自身から十字架につけられた方を通して与えられた希望を育てている。<sup>(21)</sup> (110,3)

キリスト者について述べられているが、戦争放棄とともに、キリスト者がフィランソロピアの主体であることが述べられている。対象、内容は確実に分らないが、敬虔や義、信仰といった宗教的徳性と並んでいるところからフィランソロピアは隣人愛のことを述べていると解釈しても無理はないであろう。

(J-6) あなた方のとびぬけた悪事は、あなた方が殺害したこの義人、そしてその方から敬虔で義しくフィランソロピアであることを受け取った子どもをも憎んでいることです。<sup>(22)</sup> (136,2)

ここでもキリスト者について述べられているが、キリスト者がキリストから敬虔、義、フィランソロピアを受け取ったと述べられている。主体がキリスト者であることを除くと、対象も内容も不明にとどまるが、文脈から推して隣人愛のことと考えてよいと思われる。

ユスティノスの著作におけるフィランソロピアの用例を考察すると、神のフィランソロピアとキリスト者のフィランソロピアの二つに分けることができる。神のフィランソロピアは、人間に律法を与え、罪を赦すことであった。またキリスト者のフィランソロピアは、その対象が不明ではあるのだが、文脈上「節制」、「正義」、「敬虔」と並んでおり、聖書的な隣人愛と同義と見ることが可能だと思われる。ただし直接救貧とむすびつけて論じるものはない。

#### 4. ユスティノス以外の弁証家におけるフィランソロピアの用例

使徒教父に分類される弁証家クアドラトスの場合は著作自体がエウセビオスの『教会史』のなかに確認される断片が数行しか残っておらず（第4巻3章2節）、少なく

(20) πιστεύσαντες ὅτι ἐλέημων ὁ θεὸς καὶ φιλόνητος ἐστὶν ἐπὶ πάντας τοὺς μετατιθημένους ἀπὸ τῆς κακίας, ὡς καὶ αὐτὸν τὸν βασιλέα τῆς πόλεως ἐκείνης καὶ τοὺς μεγιστάνας ὁμοίως σακκοφορήσαντας προσμεμνηκέναι τῆ νηστεία καὶ τῆ ἰκείσια, καὶ ἐπιτυχεῖν μὴ καταστραφῆναι τὴν πόλιν αὐτῶν.

(21) πολεμικὰ ὄργανα ἕκαστος, τὰς μαχαίρας εἰς ἄροτρα καὶ τὰς ζιβύνας εἰς γεωργικά, μεταβάλομεν, καὶ γεωργοῦμεν εὐσεβίαν, δικαιοσύνην, φιλονητοπίαν, πίστιν, ἐλπίδα τὴν παρ' αὐτοῦ τοῦ πατρὸς διὰ τοῦ σταυρωθέντος,

(22) Τὸ δὲ ὑπερβάλλον ὑμῶν τῆς κακίας τὸ καὶ μισεῖν ὃν ἐφονεύσατε, δίκαιον καὶ τοὺς ἀπ' αὐτοῦ λαβόντας εἶναι ὅπερ εἰσίν, εὐσεβεῖς καὶ δίκαιοι καὶ φιλόνητοι.



ともそこではフィランスロピアは確認できない。

またアリストイデスの場合、130年頃ハドリアヌス帝に提出したという『弁証論』のギリシア語原文はほとんど散逸するが、救貧記事としては次のようなものが見出される(15章7節)。

彼らは(=キリスト者)は他の神々を礼拝しません。また完全な謙遜と慈愛のうちに歩み、虚偽は彼らのもとでは見出されません。互いに愛し合います。寡婦を見下すことなく、孤児を苦しめることなく、持てる者は持たない者に非難されることのない仕方で供給し、寄留者を見かけたら、屋根の下に導いてやって本当の兄弟のように歓待する。というも肉に従って自分たちを兄弟と呼ぶのではなく、魂に従ってそうするからである。

この箇所はブリティッシュ・ミュージアム所蔵のパピルス 2486 番の表面 (recto) にギリシア語断片として残っているものであり、そこにはフィランスロピアは確認できない<sup>(23)</sup>。「慈愛」と訳した部分も ἐπιεικείς である。救貧の対象とされる寡婦、孤児、寄留者について「兄弟のように歓待する」と述べており、素直に考えるなら、フィランスロピアよりもフィラデルフィア(兄弟愛)の方がふさわしいと言える。

続いて、サルディスの司教メリトンを取り上げる。彼は170年ごろマルクス・アウレリウス帝に宛てて『弁明』を書いたとされ、その一部が残存している(エウセビオス『教会史』第4巻26章など)。また『復活祭論』(De Pascha)も一部エウセビオスが保存している。そのなかでマルクス・アウレリウス帝宛ての弁明において1箇所フィランスロピアの用例が見られる(I, 3 = HE 4, 26,5-11)。

(M-1) わたしどもは、あなた(=マルクス・アウレリウス帝)がこれらについてもこの人びとと同様の評判を得、またいっそうフィランスロピアがあり、またいっそう愛知に富んでいるのですから、わたしどもがあなたを必要とすることは何でも行ってくださるものと信じております。<sup>(24)</sup>

この用例はキリスト教について述べたものではなく、皇帝を賛美するものであって、皇帝の徳としてフィランスロピアを語っている。

さらにアテナゴラスにおいては、『キリスト者のための弁明』に6箇所で7例が認

(23) H. J. M. Milne, A new fragment of the Apology of Aristides, JThS 25(1923/24), p.73-77. なお次の文献にも再録されている。G. Krueger, Aristides, Apologie 15,6-16,1 im Urtext, ThLZ 1924 Nr.2, 47-48. 引用した原文は次の通り(アクセント記号等はなし)。θεους αλλοτριους ουπροσκυνουσιν πραεις και επιεικεις και αιδημονες αφευδεις εισιν και αλληλους αγαπωσιν χηραν ουκ υπερωσιν ορφανον δε σωζουσιν ο εχων τω μη εχοντι ανεπιφθονως χορηγουσιν ξενους ινα ειδωσιν υπο την ιδιαν στεγην εις αγουσιν και χαιρουσιν επι αυτων ως επι αδελφω αληθινω ου γαρ κατα σαρκα αδελφους εαυτους καλουσιν αλλα κατα ψυχην.

(24) Σὲ δὲ καὶ μᾶλλον περὶ τούτων τὴν αὐτὴν ἐκείνοις ἔχοντα γινώμην καὶ πολὺ γε φιλανθρωποτέραν καὶ φιλοσοφωτέραν, πεπίσομεθα πάντα πράσσειν ὅσα σου δεόμεθα. テキストは次の文献を使用。O. Perler, Meliton de Sardes. Sur la Paque et fragments, SC123, Paris; Editions du Cerf, 1966.

められる。177年に執筆されたと考えられるアテナゴラスの文書は、マルクス・アウレリウス帝と共同統治者コモドゥス帝に向かって、キリスト教の神の教理を説き、人肉食や近親相姦といった風評が出鱈目であることを弁明する。残念ながらそこには救貧記事は見出せない。そこでフィラソロピアの用例分析に集中するが、用例の第一はマルクス・アウレリウスとコモドゥスの両帝について、その(A-1)「優しさ、柔和さ、万人に対する平和的でフィラソロピアなところ」<sup>(25)</sup> (1章2節)に言及するものであり、上述のメリトンと同様の用例となっている。また同様に、両帝について(A-2)「あなた方、もっとも偉大で、もっともフィラソロピアに富み、最も好学なる帝王たちの業」<sup>(26)</sup> (2章1節)と言及する。また文書を閉じる末尾にあたる37章1節でも同様に、両帝についてフィラソロピアが述べられる。(A-3)「今度はあなた方が、すなわち資質も教育も申し分なく、中道公平でフィラソロピアに満ち、統治するにふさわしいあなた方・・・」<sup>(27)</sup>。そしてアンティノスなる人物について述べる30章2節でも(A-4)「そしてアンティノスは、家臣に対するあなた方の先祖たちのフィラソロピアによって神と見なされるようになった」<sup>(28)</sup>と言われ、ハドリアヌス帝の寵臣が皇帝のフィラソロピアによって神とされたと述べられている。こうした皇帝の徳としてのフィラソロピアはキリスト教的というのではなく、むしろギリシア的かつローマ的である。

続いてはキリスト者の生活についてフィラソロピアを述べる箇所であるが、三箇所がほぼ同じ文脈に属している。まず二箇所は次の引用に見られる。

(A-5/6) むしろわたしたちはやがて、この地上での生活すべてについて、わたしたちとこの世界を創造された神に釈明を申し述べることになるかと確信しておりますので、わたしたちは控え目でフィラソロポスで(異教徒からは)軽蔑されそうな生き方を選んでいくのです。そうするのは、この地上では、たとえだれかがわたしたちの生命を取り去ることがあろうとも、やがてあの世でわたしたちの柔和でフィラソロポスで寛大・公平な生活に対してかの偉大な裁判官から受けることになるものに比べれば、それに匹敵するほどに大きな悪に打ち負かされることにはなるまいと信じているからです。<sup>(29)</sup> (12,1 [2回])

(25) τὸ πρᾶον ὑμῶν καὶ ἡμερον καὶ τὸ πρὸς ἅπαντα εἰρηνικὸν καὶ φιλάθρωπον. テキストは次の文献を使用。W. R. Shoedel, *Athenagoras. Legatio and Resurrectione*, Oxford; Clarendon Press, 1972.

(26) ὑμῶν ἤδη ἔργον τῶν μεγίστων καὶ φιλαθρωποτάτων καὶ φιλομαθεστάτων βασιλέων. なおここで「帝王たち」(βασιλεων)と記されることから、この著作がマルクス・アウレリウスとコモドゥスの共同統治の時期と推定される。

(27) ὑμεῖς δὲ ὧ πάντα ἐν πᾶσι φύσει καὶ παιδείᾳ χρηστοὶ καὶ μέτριοι καὶ φιλάθρωποι καὶ τῆς βασιλείας ἀξιοί

(28) καὶ Ἄντινους φιλαθρωπία τῶν ὑμετέρων προγόνων πρὸς τοὺς ὑπηκόους ἔτυχε νομίζεσθαι θεός

キリスト者の生活ぶりを述べる文脈にあるが、キリスト者について「控えめでフィランソロピスで、軽蔑されそうな生き方」を選択しているという。「軽蔑されそう」といってもその内容は不明であるが、邦訳者は「面白みのない、つましい生き方」だと注釈する。数行後に「柔和でフィランソロピスで寛大・公平な生活」と記されており、同様にフィランソピアに言及する。その主体がキリスト者であることは確かであるが、ここからフィランソピアの対象、内容を知ることはできない。しかし次の引用からは内容について若干窺い知ることができる。

(A-7) さらにこの人びとは、単に友人を愛するにとどまらないほど、それほどまでに高くフィランソピアを極めるのです。いわく「自分を愛してくれる人を愛したところで、またあなたがたに貸してくれる人に貸したところで、あなたがたはどんな報いを得るのか。[ルカ6:32;34] わたしたちはこれほどまでのあり方を、これほどまでの生を生きているのですから、わたしたちが告訴されることから逃れるためにも、神に対して敬虔であると信じてはいただけないのでしょうか。<sup>(30)</sup> (12, 3)

ここでフィランソピアは友愛以上のものとして提示され、友人ばかりでなく、友人以外の者を愛すると述べられている。主体はキリスト者であるが、対象は友人以外なので貧者を含むと考えることができそうである。ルカ福音書の引用を手掛かりにすると、自分を愛してくれない人、自分に貸してくれない人をも愛するということになるので、前者は敵対者、後者は敵対者の場合もあるが、貧者を含む可能性はあろう。しかしこの点はあまりに蓋然的でここで主張するには至らない。要するにフィリアが狭く友人を対象とするのに対して、フィランソピアは友人に限らず、敵対者を含め、ひろく「人間」を対象とするというのであろう。

最後になるが、アンティオケアのテオフィロスにおいて一例が見出せる。「アウトリュコスに送る」はキリスト教文学として創世記の創造物語を集中的に解釈したはじめての文書にあたるが、当該箇所は人間創造に関するものであって、神は人間を不死にも可死的にも造ったのではなく、両方の可能性の下に造り、人間は不従順であったので死すべきものになったと語る。

(Th-1) すると人間が怠惰と不従順によってみずからに得たところのもの、そのものをいまや神は、もしも人間が神に従うならば、神に特有のフィランソピアと憐みによって人間に与えるのである。<sup>(31)</sup> (第2巻27章)

(29) ἀλλ' ἐπεὶ πεπίσμεθα ὑφέξιαν παντός τοῦ ἐνταῦθα βίου λόγον τῷ πεπειρηκότι καὶ ἡμᾶς καὶ τὸν κόσμον θεῷ, τὸν μέτριον καὶ φιλόανθρωπον καὶ εὐκαταφρόνητον βίον αἰρούμεθα, οὐδὲν τηλικούτου πείσεσθαι κακὸν ἐνταῦθα νομίζοντες κἂν τῆς ψυχῆς ἡμᾶς ἀφαιρῶνταί τινες, ὧν ἐκεῖ κοιμούμεθα τοῦ πρᾶου καὶ φιλανθρώπου καὶ ἐπεικουῦς βίου παρά τοῦ μεγάλου δικαστοῦ.

(30) μέχρι τοσούτου δὲ φιλοανθρωπότατοι ὥστε μὴ μόνον στέργειν τοὺς φίλους (εἰάν γὰρ ἀγαπᾶτε, φησί, τοὺς ἀγαπῶντας καὶ δανείζετε τοῖς δανείζουσιν ὑμῖν, τίνα μισθὸν ἔχετε;), τοιοῦτοι δὲ ἡμεῖς ὄντες καὶ τὸν τοιοῦτον βιούντες βίον ἵνα κριθῆναι διαφύγωμεν, ἀπιστούμεθα θεοσεβείν;

神の特性としてフィランソロピアが捉えられているが、「憐み」(ἐλεημοσύνη)と並置されている。その対象は人間であり、人間が不従順によって喪失した不死を、人間が従順になることで神が恵むことを意味する。ひろく救済の業と捉えられる内容である。

## 5. 使徒教父文書ならびに弁証家におけるフィランソロピアの用法

以上の論述をもとにこれまでの考察をまとめ、フィランソロピアの用法について検討してみる。まずフィランソロピアの主体に則して用例を分類してみよう。丸括弧内に可能な範囲でその内容、備考を記し、また対象を挙げてみる。なお明確に対象が何かが分るものは5例のみにとどまり、他は対象が不分明なままに使われている。

A. 神について：D-1 (創造：世界), D-2 (摂理?), J-1, J-2 (律法の授与?), J-3 (罪の赦し：回心者), J-4 (罪の赦し：回心者), Th-1 (救済：人間) 以上7例。

B. 皇帝について：M-1, A-1, A-2, A-3, A-4 以上5例。

C. キリスト者：J-1, J-5 (隣人愛?), J-6 (キリストから受領), A-5/6 (隣人愛?), A-7 (愛敵? : 友人以外の人、敵? 貧者?) 以上6例。

J-1は神とキリスト者の両方を含意するのでAとCにまたがるが、全体とし17例が使徒教父文書ならびに弁証家におけるフィランソロピアの用例となる。

まず純粋に使徒教父に数えられるクレメンス、イグナティオス、ポリュカルポスなどにおいてフィランソロピアの用例は確認できない。またクアドラトゥス、アリストティデスの場合も同様であった。すると、新約聖書外典、偽典についての考察をまたねばならないが、二世紀前半のキリスト教文学のなかでフィランソロピア概念の用例は皆無の可能性もある。少なくとも新約文書にもほとんど用例がないことを考慮すると、使われたとしても重要な概念としてではなく、せいぜい神のフィランソロピアを述べるにとどまるのではと推定される。

二世紀後半になるとユスティノス、アテナゴラス、「ディオグネトスへの手紙」などにおいてフィランソロピアの用例は比較的目に止まるようになる。神のフィランソロピア、皇帝の徳としてのフィランソロピア、それらと並んでキリスト者のフィランソロピアも語られるが、キリスト教界の外に向かった弁明書という性格を考えると、この言葉はまだまだ外向きの概念に止まっているのであって、積極的にキリスト教思想の展開とはなっていない。神のフィランソロピア、皇帝のフィランソロピア、さら

(31) ὁ οὖν ἑαυτῷ περιποιήσατο δι' ἀμελείας καὶ παρακοῆς, τοῦτο ὁ θεὸς αὐτῷ νυνὶ δωρεῖται διὰ ἰδίας φιλανθρωπίας καὶ ἐλεημοσύνης, ὑπακούοντος αὐτῷ τοῦ ἀνθρώπου. テキストは次の文献を使用。R. M. Grant, *Theophilus of Antioch. Ad Autolyucum*, Oxford, 1970. 邦訳は次の文献の通り。今井知正訳「アウトルュコスに送る」、『中世思想原典集成1』所収、平凡社、1995年、143頁。

にキリスト者のフィランスロピアでさえも、フィランスロピアに言及はされても、その対象を明確にするようなテキストは全体で5例に止まり、従って他の多くの場合は具体的内容が定めがたく、むしろとってつけたように挿入されている。あたかもその言葉を使うだけで、読み手が安心するような印象である。この点を考慮するならば外向きの概念と考えられていたと思われる。神のフィランスロピアも個々のテキストでは律法の授与、罪の赦しなど旧約的・キリスト教的な内容を表現したものになってはいるが、その意味は一定することなく、ひろく神の恵みを意味する概念として多用されている。いずれのテキストにおいても、弁証として自分たちの正しさを主張するという目的を差し引いて考えるなら、内容が不分明のものも含めて、わざわざフィランスロピアを使う理由がよく分らないものばかりである。内向きには、むしろ「神の恵み」や「隣人愛」などの概念で十分であったはずである。

先に第2節で考察したように、使徒教父文書に見られた救貧思想として注目されるのは、富者と貧者の二者に加えて、神という第三者が介在して救貧を成り立たせている点である。ともすれば富者の一方的な施しに終始する救貧の業というものが、神が介在することで互惠性の性格をもつようになっている。さらにそのために貧者の業として祈祷という行為が立てられる。来世信仰を加えてキリスト教は2世紀にはすでに救貧のための思想基盤を形成していたと言えよう。ところが、2世紀には、こうした救貧思想を論ずるためにフィランスロピアは使われていないのである。この点からもフィランスロピアの概念がまだまだ外向きのものであって、キリスト教固有の実践や思想を表現する言葉とはなっていないと理解される。例外としてアテナゴラスの用例に愛敵を表現すると解釈できるものがあったが、可能性のレベルとしてもこの一例に止まる。

## むすび

以上の考察から、使徒教文書と弁証家の著作に見られるフィランスロピアの用例を検討するならば、2世紀にこの概念は、まだまだ救貧思想等を表現するキリスト教固有の言葉とはなっておらず、弁明のために使われる外向きの言葉であったと言える。用例数の少なさもこの点から十分説明できよう。

ところで251年頃、ローマ教会は長老ノヴァトスの監督叙階問題で揺れていた。ローマ教会の監督職を望んだノヴァトスは異端として追放されるが、当時ローマの監督コルネリウスはこの問題について書簡を残しており、その中でローマ教会の聖職者について次のように述べている。

[このローマの教会では] 彼も知っていますように——知らないことはありません

ん——46人の長老と、7人の執事、7人の副執事、42人の侍者、52人の祓魔師と、読師、門番、主の恵みとフィランソロピアによって養われている1500人以上の寡婦や困窮者がいます。

エウセビオスの『教会史』第6巻43章11節に再録されているこの書簡の一部によると、3世紀中頃にローマ教会では、1500人以上の「寡婦」と「困窮者」が養われていたという。ここでいう「寡婦」も「困窮者」も単純な生活上の事実を指している言葉ではなく、文脈から推して下位の聖職者と判断される。先に第2節に見たように、同じローマで執筆された『ヘルマスの牧者』で論じられていた富者のために祈祷をささげる貧者が百年ほどの時を経て、ここでこのように言及されていることが分かる。そしてここではこうした救貧のことを指して「主の恵みとフィランソロピア」と述べられている。このフィランソロピアの用例は、明確に救貧を指すものであって、神が主体、対象は寡婦と困窮者、その内容はこの人びとを養うことをいう。3世紀半ばには、このような救貧の文脈でフィランソロピアが使われるのである。2世紀には確認できなかったテキストが、3世紀になると確認できるようになる。フィランソロピア概念をめぐってどのような事態の変化が起こったのか。この点については、稿を改めて考察したい。

※本研究は、科学研究費補助金（基盤研究C：研究課題「古代キリスト教思想におけるフィランソロピア」）の交付を受けて行った研究の一部になることを付記しておく。